# 怪しの者

国枝史郎

# 一

乞食の権七が物語った。

尾張の国春日井郡、庄内川の岸の、草の中に寝ていたのは、正徳三年六月十日の、午後のことでありました。いくらか靄（もや）を含んでいて、白っぽく見えてはおりましたが、でもよく晴れた夏の空を、自分の遊歩場（あそびば）でもあるかのように、鳶（とび）が舞っておりましたっけ。

ふと人の気勢（けはい）を感じたので、躰（からだ）を蔽（おお）うている草の間から、わたしはそっちを眺めました。

　二十八、九歳の職人風の男が、いつのまにやって来たものか、わたしのいるところから数間（すうけん）はなれた岸に、佇んでいるではありませんか。（はてな？）とわたしは思いながら、その男の視線を辿って行きました。岸に近い水面を睨んでいました。そこでわたしも水面を見ました。
（成程、これじゃア誰だって、眼をつけるだろうよ）と、わたしは呟きましたっけ。この川（幅三十間といわれている庄内川）は、周囲にひろがってい、広漠（ひろびろ）とした耕地一帯をうるおす、灌漑（かんがい）用の川だったので、上流からは菜の葉や大根の葉や、藁屑（わらくず）などが流れて来

ていましたが、どうでしょう、流れて来たそれらの葉や藁屑が、その男の立っている辺まで来ますと、緩（ゆる）く渦（うず）をまき、躊躇（ちゅうちょ）でもするように漂ったあげく、沈んでしまうではありませんか。（あれへ眼をつけるあの野郎こそ怪しい）

と、私といたしましては、職人風の男へかえって不審を打ったのでございます。

（只者じゃアない、うろんな奴だ）

私は考えに沈みながら、広い耕地を見やりました。野菜の名産地の尾張城下の郊外です、畑という畑には季節（とき）の野菜が、濃い緑、淡い緑、黄がかった緑などの

氈(かお)を敷いておりましたっけ。人家などどこにも見えず、百姓家さえ近所にはありませんでした。いやたった一軒だけ、数町はなれた巽(たつみ)の方角に、お屋敷が立っておりましたっけ。それも因縁づきのお屋敷が。……尾張様の先々代継友卿(つぎともきょう)が、お家督(よつぎ)の絶えた徳川宗家(そうけ)を継いで、八代の将軍様におなりなさろうとしたところ、紀伊様によって邪魔をされて、その希望(のぞみ)が水の泡と消え、紀伊様が代わって将軍家になられた。当代の吉宗(よしむね)卿で。……その憂鬱(ゆううつ)からお心が荒(すさ)み、継友様には再三家臣をお手討ちなされましたが、その中に、平塚刑部様という、御用人があり、生前に建てた庄内川近くの

別墅（やしき）へ、ひどく執着を持ち、お手討ちになってからも、その別墅へ夜な夜な姿を現わされる。——という因縁づきのお屋敷なので。

（流れ屑が自然（ひとりで）に沈む淵があったり、化け物屋敷があったりして、この界隈（かいわい）は物騒だよ）と、私は呟（つぶや）いたことでした。

## 二

（おや）と驚いて川添いの堤へ眼をやったのは、それから間もなくのことでした。野袴（のばかま）を穿（は）き、編笠（あみがさ）をか

むった、立派なみなりのお侍様五人が、半僧半俗といったような、円(まる)めたお頭(つむ)へ頭巾(ずきん)をいただかれ、羅織(うすもの)の被風(ひふ)をお羽織りになられた、気高いお方を守り、こなたへ歩いて来るからでした。

（これは大変なお方が来られた）

こうわたしは呟(つぶや)きましたが、半僧半俗のそのお方が、前(さき)の尾張中納言様、ただ今はご隠居あそばされて、無念坊退身(むねんぼうたいしん)とお宣(なの)りになり、西丸に住居しておいであそばす、徳川宗春様であられるのですから、驚いたのは当然でしょう。

と、宗春様はお足をとめられ、何やら一人のご家来

に向かい、ささやかれたようでございました。するとそのご家来は群れから離れ、職人風の男の側へ寄って来ましたが、

「これ其方そこで何をしておる」と、厳めしい口調で申されました。

「川を見ているのでございますよ」そう職人風の男は申しましたっけ。

「川に何か変わったことでもあるのか」

「いいえそうではございませんが。所在なさに見ていますんで」

「所在ない？　なぜ所在ない」

「わたしは大工なのでございますが、親方のご機嫌をとりそこなって、職を分けてもらうことができなくなったんで。……どうしたものかと、思案しいしい歩いていますうちに、こんなところへ来ましたんで。……そこでぼんやり川を眺めて……」

「大工、そうか、手を見せろ」

「手を？　なんで？　なんで手を？」

「大工か大工でないか調べてやる」

「…………」

「大工なら鉋（かんな）だこがあるはずだ」

「…………」

「これ手を出せ、調べてやる。……此奴（こやつ）手を懐中（ふところ）へ入れおったな！」

「斬れ！」

とその時烈しいお声で、宗春様が仰せられました。

「あッ」

これはわたしが言ったのです。

ご家来が編笠をうしろへ刎（は）ね、抜く手も見せず、職人風の男の右の肩を、袈裟（けさ）がけにかけたからで。

職人風の男は倒れました。でもそれは斬られて倒れたのではなくて、太刀先を避けて倒れたのです。

「汝（おのれ）！」

と西条勘右衛門（さいじょうかんえもん）様は——そう、編笠が取れましたので、そのご家来が尾張の藩中でも、中条流（ちゅうじょうりゅう）では使い手といわれる、西条様だということがわかりましたが、そう仰せられると、踏み込み、刀を真向（まっこう）にふりかぶり、倒れている職人風の男の背をめがけ、お斬りつけなさいました。

が、その途端に土と小石と、むしられた草とがひとつになって、バッと宙へ投げ上げられ、つづいて烈しい水音がして、職人風の男は見えなくなってしまいました。川へ飛び込んで逃げたのでした。

## 三

二度目にこの男と逢(あ)いましたのは、それから三日後のことでありまして、名古屋お城下は水主町(かこまち)、尾張様御用の船大工の棟梁(とうりょう)、持田(もちだ)という苗字(みょうじ)を許されている八郎右衛門というお方の台所口で。

燈(ひ)ともしころのことでありまして、わたしはその日、そのお宅へ、物乞(ものご)いに参ったのでございます。それまでにも再々参ったことがありまして、そのお宅はいわばわたしにとりましては、縄張りの一つだったのでございます。ご主人様がご親切だからでございましょう

が、下女下男までが親切で、わたしの顔を見ますると「勢州(せいしゅう)が見えたから何かやりな」と、面桶(めんつう)の中へ、焚(た)きたてのご飯などを、お入れ下さるのでございます。

さてその日も、ご飯を頂戴いたしましたので、台所口から出て、塀(へい)に添って往来(とおり)の方へ歩いて行きました。

すると行く手から、一人の男がやって参りましたが、お台所ちかくまで参りますと、にわかに呻(うめ)き声をあげて、地へ倒れたではございませんか。驚いてわたしは引き返し、その男の側へ参り、顔を覗(のぞ)きこみましたところ、例の男だったのでございます。

（さてはこの男ここでまた一芝居(ひとしばい)を……）

と、胸にこたえるところがありましたので、いっそ蹴殺してやろうかと足を上げました。

## 四

ところが、お台所口から射し出している燈(ひ)の光で、その男の地に倒れている姿が、女中衆や下男衆に見えたとみえて、飛び出して来て、

「可哀そうに」

「行き倒れだね」

「自身番へ知らせてやんな」

「何より薬を」
「水を持って来い」
などと、口々に言って、その男の介抱にかかったではありませんか。その騒がしさに不審を打ちましたものか、持田様のお嬢様と、そのお気に入りのお上女中（かみじょちゅう）のお柳さんというお方が、奥から出て参られ、
「気の毒だから家（うち）へ入れて介抱してあげたがいいよ」
と言われました。下男衆がその男をかかえて、家の中へ運んで行く時、その男の顔を覗き、
「好（い）い縹緻（きりょう）ね」
とお嬢様のお小夜様が、お柳という女中へささやか

れたのを聞いて、わたしは厭な気がいたしましたっけ。それというのも日ごろから、そのお美しさと初々しさとに、感心もし敬ってもいる、お小夜様だったからでございます。お小夜様のお年は十九歳でございましたが、すこし小柄でございましたので、十七歳ぐらいにしか眺められず、小さい口、つまみ鼻、鮠の形をした艶のある眼、人形そっくりでございました。大工の棟梁とは申しましても、尾張様御用の持田家は、素晴らしい格式を持っていまして、津田助左衛門様、倉田新十郎様、などという、清洲越十九人衆の、大金持の御用達衆と、なんの遜色もないのでありまして、その

持田様のお娘御でございますことゆえ、召されておられるお召し物なども、豪勢なもので、髪飾りなどは銀や玳瑁（たいまい）でございました。

「ほんとに好い男振りでございますのね」

とお柳という女中も申しましたっけ。

「馬鹿め、何が好い男だ！」

とうとうわたしは腹立たしさのあまり、かなり烈しい声で、そう言ったものでございます。するとどうでしょうお柳という女は、わたしをジロリと見返しましたが、「いいじゃアないか、お嫉妬（やき）でないよ」

と、言い返したではありませんか。

それから十日ばかりの日がたちました。ある日わたしはいつものように、縄張りの諸家様(しょけさま)を廻り、合力(ごうりき)を受け、夕方帰路につきました。鳥にだって寝倉がありますように、乞食にだって巣はございますので。瓦町(かわらまち)の方へ歩いて行きました。考えごとをしておりましたので。町の口へ参りましたころには、初夜(しょや)近くなっておりましたっけ。ふと行く手を見ますと、一人のお侍さんが、思案にくれたように、首を垂れ、肩をちぢめて歩いて行く姿が、月の光でぼんやりと見えました。

（途方にくれているらしい）わたしはおかしくなりました。（殺生（せっしょう）だが一つからかってやろう）というのは、そのお侍さんの誰であるかが、私にわかっていたからで。

そこでわたしはお侍さんに近より、

「討ち損じたは貴郎様（あなたさま）の未熟、それでさがし出して討とうとなされても、あてなしにおさがしなされては、なんではしっこい江戸者などを、さがし出すことができましょう」

と、ささやくように言ってやりました。

西条勘右衛門様の驚くまいことか——そう、そのお

侍様は西条様なので――ギョッとしたように振りかえられました。でも見廻した西条様の眼には、菰（こも）をまとい竹の杖をつき、面桶（めんつう）を抱いた乞食のほかには、人っ子一人見えなかったはずで。そうしてまさかその乞食が、今のようなことを言ったとは、思わなかったことと存じます。

はたして西条様は、自分の耳を疑うかのように、首をかしげましたが、やがて足を運ばれました。そこでわたしもしばらくの間は、無言で従（つ）いて行きました。でもまたこっそり背後（うしろ）へ近寄り、ささやくように言ってやりました。

# 五

「大工だと申したではございませんか。ではお城下の大工の棟領を――それも船大工の棟領を、おしらべなさいましたら、あの男の素性も、現在のおり場所も、おわかりになろうかと存ぜられまする」

「チエ」

もうこの時には西条様の刀が、抜き打ちにわたしの右の肩へ、袈裟(けさ)がけに来ておりました。

わたしは前へつんのめりました。

「そう、あの男もこんなように、貴郎様の太刀先をのがれましたねえ」
「乞食め！」
と西条様はわたしの背を目がけ、斬りおろしました。それを掻(か)いくぐって左へ飛び、
「ここに庄内川がありましたら、わたしもあの男のように川へ飛び込んで、のがれることでございましょうよ。……それにしても惜しいものだ、乞食にばかりこだわらずに、素直に私という人間の言葉を聞いて、持田さんあたりを調べたら、たいした功が立てられるのに……」

言いすててわたしは露路の一つへ駈(か)けこみましたっけ。

庄内川の岸で、職人風の男を討ちそこなって逃がし、西丸様からお叱りを受け、どうあろうとその男をさがし出し、討ってとれとの厳命を受け、さがし廻っているがわからない。そのムシャクシャしている腹の中へ、グッと棒でも突っ込んだように、わたしの言葉がはいったのですから、わたしに対する憎しみは烈しく、あくまでも斬りすてようと、わたしの後(あと)を追って、西条様が、露路へ駈け込んで来たのは、当然のことかと存ぜられます。でも露路には枝道(えだみち)が多く、こみいって

おりましたので、わたしがどこへかくれたか、西条様にはわからなかったようです。

その西条様がぼんやりした様子で、一軒の家の前に佇んだのは、それから間もなくのことでした。平家だての格子づくりの、粋な真新しい家の前でした。

と、格子戸の奥の障子が、土間をへだてて明るみ、やがて障子が開き行燈をさげた仇っぽい女が、しどけない姿をあらわしました。睫毛の濃い大型の眼、中だるみのない高い鼻、口はといえばこれも大型でしたが、受け口めいておりましたので、色気にかけては充分で

した。空（あ）いている左手を鬢（びん）へ持って行き、女のくせで、こぼれている毛筋を、掻（か）きあげるようにいたしましたが、八口（やつくち）や袖口から、紅色がチラチラこぼれて、男の心持を、迷わせるようなところがありました。及び腰をして格子戸の方を隙（す）かし、

「どなた、宅にご用？」

と、含みのある水っぽい声で言ったものです。

「いや」

と西条さんは狼狽（ろうばい）したような声で、

「狼藉者（ろうぜきもの）が入り込んだのでな」

「狼藉者？　気味の悪い……どのような様子の狼藉者

で？」
「乞食じゃよ、穢(きた)ない乞食じゃ」
「お菰(こも)さん、おやおや……お菰さんでございましたら、もうこの辺へは、毎日のように、いくらでも立ち廻るのでございますよ」
「それが怪(け)しからん乞食でな」
「旦那様に失礼でもなさいましたので？」
「うむ、まあ、そういったことになる」
「息づかいがお荒うございますのね。お水(ひや)でも……」
「水か、いや、それには及ばぬ」
「ではお茶でも、ホ、ホ」

その女は、プリプリしているお侍さんを、からかってやろうというような様子を、見せはじめましてございます。

「戸じまりなど充分気をつけるがよいぞ」

西条様はテレかくしのように言って、歩き出されました。

女は持田様の女中お柳でございました。そうしてそのお柳は少したったのちには、この家の奥の茶の間にすわって、丹前（たんぜん）を着た三十五、六の、眼の鋭い、口元の締まった武士と、砕けた様子で話していました。長火鉢の横には塗り膳があって、それには小鉢物がのせ

てあり、燗徳利などものせてあるという始末で。お柳がその男を旗さんと呼んだり、頼母さんと呼んだりするところを見ると、それがその男の姓名であり、二人の間柄は、情夫情婦のようでありました。

そうして、その旗頼母という武士こそ、勢州と呼ばれているこの乞食の私なのでございます。どうして武士の私が乞食などになっているかと申しますに、ある重大な計画の秘密を探るためなので。つまり私は乞食に身を俏して隠密をしているのでございます。庄内川の岸に寝ていたのも、持田家の周囲を立ち廻ったのも、そのためなので。それにしてもどうして露路へ逃げ込

んだ私が、そんな家で、お柳と、取膳で、酒など飲んでいたのかと申しますに、私は、露路へ逃げ込むや、その家——それは私の隠れ家なのですが、その家の前のしもた家の蔭に隠れて、お柳と西条様との会話(はなし)を聞いていたのでしたが、西条様が立ち去るやすぐに私は、自分の家の裏口から台所へはいって行き、持田家の秘密を探らせるために、持田家へ、女中として入り込ませておいたお柳が、持田家の秘密を持って、この夜来合わせていたのに手伝わせ、乞食の衣裳を脱ぎ、行水を使い、茶の間で、そんなように、取膳で……と、いうことになったのでありまして、さてそれからは、私

とお柳との会話（はなし）になるのでございます。——
「今夜は泊まって行ってもいいのだろう」これは私で。
「というわけにもいかないのさ。……何しろお嬢様があんなだからねえ」
「惚れるのに事を欠いて、あんな野郎に惚れるとはなア」
「鶴吉と宣っているあの江戸者、女にかけちゃア凄いものさ」
「そこへもって来てお小夜坊（さよぼう）が、初心（うぶ）の生娘（きむすめ）ときているのだからなあ」
「ころりと参って無我夢中さ」

「駆け落ちの相談ができ上がったとは、呆(あき)れ返って話にもならない」

「世間知らずの娘だからだよ」

「男の素性に気もつかずか」

「男の心にも気がつかずさ」

「まったくそうだ、だから困るのさ。本当の恋からの所業(しわざ)ならいいのだが、そうでないのだから恐ろしい」

「江戸へうまうま連れ出されてから、どうされるかってこと、知らないんだからねえ」

「生き証拠にされるってこと、ご存知ないからお気の毒さ」

お柳の注いだ猪口（ちょこ）を私は口へ持って行きました。

## 六

「駆け落ちの日にちと刻限とに、間違いがあっちゃア大変だが」

「今日から五日後の子（ね）の刻さ。たしかめておいたから大丈夫だよ」

「お前（めえ）も従（つ）いて行くんだったな」

「そうさ途中までお見送りするのさ。お嬢様は可愛らしいよ、何から何まで、妾（わたし）にだけはお明かしなさるの

だから」
「そこがこっちのつけめなのだが……それにしても鶴吉というあの男、お小夜坊ばかりを連れ出して、それで満足するような、優しい玉とは思われないが」
「これまでにお嬢様の手を通して、いろいろの物を引きだしたらしいよ」
「証拠になるような品をだろう」
「ああそうさ、証拠になるような品さ」
「ところで職場の仕事だが、どうだな、はかどっているようかな」
「それだけは妾にもわからないのさ。こしらえた端（はし）か

ら化け物屋敷の方へ、こっそり運んで行くのだからねえ」

「そういうことは鶴吉って男も、とうに知っているだろうに、化け物屋敷を調べないとは、どうにも俺には腑におちないよ」

「これから調べるのかもしれないじゃアないか」

「そうよなア、そうかもしれない……駆け落ちの前にか、駆け落ちの夜にかな」

私は背後の地袋を開け、木箱を取り出し、その中から太い竹の筒を取り出しました。

「こいつ湿らせちゃア大変だ」

「変な物だねえ、何なのさ？」

「いってみりゃア地雷火さ。普通にゃ落火（らっか）というが」

「地雷火？　まア、気味の悪い……どうしてお前さんそんなものを？」

「お殿様から下げ渡されたのさ」

「お殿様って？　どこのお殿様？」

「殿様に二人あるものか。俺等（おいら）のご主君は犬山の御前さ」

「それじゃア成瀬様（なるせさま）から。……でも、成瀬様がそんな恐ろしいものを……」

「いよいよの場合には火をかけろってね、俺等前もっ

て言いつけられているのさ」

この時露路のあちこちで、犬が吠(ほ)え出しましてございます。私は竹筒を木箱の中へ納め、また地袋の中へ押し入れて、犬の吠え声に耳をかしげましたが、「あらかた話は済んだらしいな。それじゃア……」

「何がさ」

「隣の部屋に紅裏(もみうら)の布団が敷いてあるってことさ」

「ばからしい、……わたしゃア小母様が病気だから、ちょっと見舞いに行って来るといって、お暇をいただいて来たんだよ」

「ありもしない小母様に病気をさせて、情夫(おとこ)に逢いに

来るなんて、隅に置けない歌舞伎者さ」
「その歌舞伎者で心配になったよ。行き倒れ者に自分を仕組んで、持田様へ抱え込まれ、ずるずるべったりに居ついてしまって、お嬢様をたらしたあの鶴吉、わたしの居ない間に、二番狂言でも仕組んで、わたしたちを出し抜きゃアしないかとねえ」
「それじゃアすぐに帰る気か」
「どうしよう」
「じらすのか。……それともじれているのか……」
「あれ、痛いよ」
見る眼に痛い絵模様となりましたので……。

# 七

相変らず菰をかむり、竹の杖をつき、面桶を抱えた、乞食のわたしが、庄内川の方へ辿って行きましたのは、それから五日後の夜のことでした。

化け物屋敷の前まで来ました。

一町四方もある、宏大なお屋敷は、樹木と土塀とで、厳重に囲まれておりまして、外から見ますると、内部の建物は、家根さえ見えないほどなのでございます。

しばらくわたしは土塀について、お屋敷の周囲をま

わりました。と、東側の小門から小半町ほど距たった辺に、こんもりした林がありました。それをわたしは眺めやりましたが（あれに任かせて置けば大丈夫さ）と、こう心中で思いまして、そのまま先へ進んで行きました。足場のよいところまでやって来ました。そこでわたしは木立へ登り、そこから土塀の頂へ登り、お屋敷の構内へ飛び下りました。構内の土塀近くに茂っているのは、松や楓や槙や桜の、植え込みでございました。

（塀外の木立ちと高い厚い土塀と、そうして内側のこの植え込みとで、こう厳重に鎧われたんでは、屋敷内

で何を企てようと、外からは見えもしなければ聞こえもしない。ましてその上に化け物屋敷などという、気味の悪い噂を立てておいたら、近寄ろうとする人はないだろう。）［＃「近寄ろうとする人はないだろう。）」は底本では「近寄ろうとする人はないだろう。」］

そんなことをわたしは思いながら、植え込みをわけて進んで行きました。と行く手から大勢の人声や、物を打つ音や物を切る音やが、潮の遠鳴りのように聞こえ、燈（ひ）の光なども見えて来ました。不意にその時人声が、此方（こなた）へ近づいて参りましたので、わたしは藪（やぶ）蔭へ身をかくしました。

「見慣れない奴でありましたよ」

「外から忍び込んだ人間らしい」

「どうあろうとさがし出して捕えねば……」

それは二人のお侍さんでした。

「居た！」

とその中の一人が、わたしを目付けて叫び、手取りにしようとしてか組みついて来ました。（やむを得ない）と思って、わたしは竹の杖を突き出しました。もちろん急所へあてたんで。かすかに呻き声をあげたばかりで、そのお侍さんは倒れてしまいました。

「曲者（くせもの）！」

この人は斬り込んで来ました。

でもその人も倒れてしまいました。

わたしの突き出した竹の杖が、うまく鳩尾（みぞおち）へはまったからで。

（ナーニ半刻（はんとき）のご辛棒で。自然と息を吹き返しまさあ）

わたしは先へ進んで行きました。

でもわたしは気が気ではありませんでした。あの鶴吉という男が、わたしのように土塀を乗り越えて、屋敷内にはいり込んだということは、わたしにはわかっておりましたが、愚図愚図しているうちに目的を遂げ

て、この屋敷から脱け出されたら、一大事と思ったからです。

わたしは先へ進んで行きました。

すると「誰だ！」という声が起こり、つづいて「わッ」という悲鳴が起こり、すぐに「曲者！」と喚く声が聞こえ、つづいて「わッ」という悲鳴が聞こえ、さらに逃げてでも行くらしい、けたたましい足音が聞こえましたが、またもや「わッ」という悲鳴が聞こえ、その後は寂然となってしまいました。

（凄いな。三人殺った！　彼奴だ！）

とわたしは走って行きました。

そうして間（ま）もなくわたしは、厳重な旅の仕度をし、黒い頭巾で顔をつつんだ、鶴吉と呼ぶ例の男と、木立ちの中で刀を構えていました。そうですわたしも竹杖（たけづえ）仕込みの刀を、ひっこ抜いて構えたのです。

わたしたちの足許にころがっているのは、三人の武士の死骸（しがい）でした。みんな一太刀で仕止められていました。

（凄い剣技（てなみ）だ、油断するとあぶない）

わたしは必死に構えました。

と、鶴吉は月の光で、わたしの姿を認めたらしく、

「なんだ、貴様、乞食ではないか。……しかし、……

本当の乞食ではないな。……宣(なの)れ、身分を！」
「そういう貴様こそ身分を宣れ！　庄内川からこの屋敷へ、大水(たいすい)を取り入れるために作り設けた、取入口を探ったり、行き倒れ者に身を俏(やつ)して、船大工の棟領持田の家へはいり込み、娘をたぶらかして秘密を探ったり、最後にはこの屋敷へ忍び入り、現場を見届けようとしたり……」
「黙れ！　此奴(こやつ)、それにしてもそこまで俺の素性を知るとは？……さては、汝(おのれ)は、……もしや汝は?!」
「……………」
「隠密(おんみつ)ではないかな？　どこぞの国の？」

「…………」

「ものは相談じゃ、いや頼みじゃ、同じ身分のものと見かけ、頼む見遁(みのが)してくれ」

### 八

「礼には何をくれる」わたしはこう言ってやりました。

「ナニ礼だと、礼がほしいのか？」

「ただで頼(たの)まれてたまるものか」

「なるほどな、もっともだ。……かえって話が早くていい。……何がほしい、なんでもやる。」［＃「何がほし

い、なんでもやる。」」は底本では「何がほしい、なんでもやる。」」

「調べた秘密をこっちへ吐き出せ」

「…………」

「抑(おさ)えた材料(ねた)を当方へ渡せ」

「…………」

「江戸まで連れて逃げようとする生き証拠を俺の手へ返せ」

「チェッ、要求(のぞみ)はそれだけか」

「もう一つ残っている」

「まだあるのか、早く言え！」

「汝（おのれ）この場で消えてなくなれ」
「ナ、なんだと？」
「汝（おのれ）に生きていられては都合が悪いと言っているのだ」

疾風迅雷とでも形容しましょうか、怒りと憎悪（にくみ）とで斬り込んで来た、鶴吉の刀の凄（すさま）じかったことは！　あやうく受け流し、わたしは木立ちの中へ駈け込みました。そのわたしを追いかけて来る、鶴吉の姿というものは、さながら豹（ひょう）でしたよ。
（駄目だ）とわたしは観念しました。（俺の手では仕止められない）

松の木を盾として、鶴吉の太刀先を防ぎながら、わたしは大音に呼びました。
「お屋敷の方々お出合い下され、江戸柳営より遣わされた、黒鍬組の隠密が、西丸様お企ての秘密を探りに、当屋敷へ忍び込みましてござる！　生かして江戸へ帰しましては、お家の瑕瑾となりましょう！　曲者はここにおりまする、お駈けつけ下され！」
　声に応じて四方から、おっ取り刀のお侍さんや、鋸や槌を持った船大工の群れが、松明などを振り照らして、わたしたちの方へ駈けつけて来ました。その先頭に立っておりましたのが、西条勘左衛門様でござ

いましたので、

「あなた様の太刀先をひっ外(ぱず)して、庄内川へ飛び込んだ男が、隠密の此奴(こやつ)でございます。川がないから大丈夫で。今度こそお討ちとりなさりませ」

「そういう貴様(きさま)は……や、いつぞやの晩……」

「あれは内証(ないしょ)にしておきましょうよ。お味方同志でございますから」

言いすてるとわたしはお屋敷の建物の方へ、一散に走って行きました。

やるべき仕事をやってしまうと、わたしは引っ返し

て来ました。屋敷の門が開(あ)いていました。で、わたしは走り出ました。

何が門外にあったでしょう？

東側の小門から、小半町ほどはなされている林の中から、人声が聞こえ、松明(たいまつ)の火が射しているのです。

わたしはそっちへ走って行きました。

そこでわたしの見たものといえば、垂(たれ)を下(さ)げた一梃(いっちょう)の駕籠(かご)の前に、返り血やら自分の血やらで、血達磨(ちだるま)のようになりながら、まだ闘士満々としている、精悍(せいかん)そのもののような鶴吉が、血刀を右手にふりかぶり、左手を駕籠の峯へかけ、自分の前に集まっている

尾張藩の武士や、持田八郎右衛門の弟子の、大勢の船大工たちを睨(にら)んでいる、凄愴(せいそう)とした光景でした。

「かかれ、汝等(おのれら)、かかったが最後だ！」

と、嗄(しわが)れた声で、鶴吉は叫びましたっけ。

「かかったが最後駕籠の中の女は、俺が一刀に刺し殺す！……持田八郎右衛門の娘を殺す！　かかれたらかかれ！」

船大工たちは口惜しそうに、口々に詈(ののし)りました。

「畜生、鶴吉！」

「恩知らず！」

——しかし棟領の秘蔵の娘を、人質にとられている

のですから、かかって行くことはできませんでした。西条様はじめお侍さんたちも、刀を構えて焦心っているばかりで、どうすることもできませんでした。というのは持田八郎右衛門は、船大工の棟領とはいいながら、立派な藩の御用番匠であり、ことには西丸様の今度のお企ての、大立物でありますので、その人の娘にもしものことがあったら、一大事だと思ったからで。

しかしわたしは遠慮しませんでした。大声で言ってやりました。

「今だ、お小夜坊、やっつけな！」

## 九

途端に「あッ」という悲鳴が起こり、刀をふりかぶったまま、鶴吉は躰を捻りましたが、やがて、よろめくと、ドット倒れました。脇腹から血が吹き出しています。

「わーッ」という声が湧き上がりましたが、これは船大工や藩士の方々が、思わずあげた声でした。でもその声はすぐに止んで、気味悪くひっそりとなってしまいました。

血にぬれた懐剣をひっさげて、駕籠の垂れを刎ねて

お小夜坊が、姿を現わしたからです。

お小夜坊ではなくてお柳(りゅう)でした。はじめて人を斬ったのでした。お柳の顔色はさすがに蒼(あお)く、その眼は血走っておりましたが、それだけにかえって凄艶(せいえん)で、わたしとしましてはお柳という女を、この時ほど美しいと思ったことは、ほかに一度もありませんでした。お柳はわたしを見やってから、船大工たちへ言いましたっけ。

「皆様ご安心なさいまし、お小夜様は妾(わたし)がお助けして、この林の奥の、藪蔭にお隠しして置きました」

歓喜の声をあげて、船大工たちが林の奥へ走って

行ったのは、いうまでもないことでございます。その間に西条様や藩士の方々は、鶴吉の息の根を止めようとしました。でもわたしは制止しました。

「どうせ死んで行く人間です、静かに死なせてやって下さい」

見れば鶴吉は断末魔に近い眼を、わたしの眼へヒタとつけて、物言いたげにしておりました。そこでわたしは近寄って行って、耳に口を寄せてささやきました。

「言いたいことがあるなら言うがいい」

「乞食に計られて死んだとあっては、オ、俺(おれ)は死に切れぬ。頼む、明かしてくれ、お前の素性を」

「もっともだ、明かすことにしよう。……尾張家の附家老（つけがろう）、犬山の城主、成瀬隼人正（なるせはやとのしょう）の家臣、旗頼母（はたたのも）、それが俺だ」

ここで私は言葉を改め、「貴殿のご姓名なんと申されるかな？」

「…………」無言で首を振るのでした。

「隠密として事破れし以上、姓名は言わぬというお心か。ごもっともでござる」

この時突然屋敷内から、火の手が立ち昇りました。

「火事だ！」

「大変だ、作事場（さくじば）が燃える！」

人々は叫んで走って行きました。
「鶴吉殿」と耳に口を寄せ、またわたしはささやきました。
「貴殿をこの地へ遣わした、そのお方が心にかけられた、宗春様ご建造の禁制の大船、ただ今燃えております。貴殿のお役目遂げられたも同然、お喜びなされ、ご安心なされ！」
「火事？……大船が？……燃えている？」
「拙者が放火いたしたからでござる」
「貴殿が……お身内の貴殿が？」
「われらが主君成瀬隼人正、西丸様お企てを一大事と

観じ、再三ご諫言（かんげん）申し上げたれど聞かれず、やむを得ず拙者に旨を含め……」

この時船大工たちがお小夜様を連れて、林の奥から出て来ました。

「お柳、お小夜様を、鶴吉殿へ！」

わたしの相棒のお柳は、お小夜様の手を取って、鶴吉の側へ連れて行きました。お小夜様は恐怖（おそろしさ）と悲哀（かなしさ）とで、生きた空もないようでございましたが、でもベッタリと地へすわると、鶴吉の項（うなじ）を膝の上へのせ、しゃくり上げて泣きました。鶴吉を愛していたのですねえ。

宗家相続の問題以来、将軍吉宗様と尾張家とは、面白くない関係となりまして、宗春様が年若の御身で、早くご隠居なされましたのも、そのためからでございますし、ご禁制の大船を造られましたのも、吉宗様に対する鬱忿晴らし、そのためだったように思われます。そのご禁制の大船ですが、もうあの時には九分がたできていて、立派なものでございました。ご主君から渡された竹筒仕込みの地雷で、わたしが焼き払いさえしなかったなら、完成したに相違ございません。庄内川から取り入れた水を、すぐに船渠へ注ぎ入れ、まず庄内川へ押しいだし、それから海へ出すように、巧みに

仕組まれてもおりました。

勢州(せいしゅう)産まれの乞食権七(こじきごんしち)、そんなものにまで身を俏(やつ)し、尾張家のためとはいいながら、あの立派な船を焼きはらったことは、もったいなく思われてなりません。

底本：「日本伝奇名作全集４　剣侠受難・生死卍巴(他)」番町書房
１９７０（昭和45）年２月25日初版発行
初出：本全集収録まで未発表
入力：阿和泉拓
校正：門田裕志、小林繁雄
２００４年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。